京都学派の哲学史的洞察

――西谷啓治の卒業論文「シェリングの絶対的観念論とベルグソンの純粋持続」について――

浅沼　光樹

第一章　問題の設定

一・一　最初期の思索の圏域

『根源的主体性の哲学』第一部・第二部

西谷啓治（一九〇〇（明治三三）年二月二七日―一九九〇（平成二）年一一月二四日）の最初の公刊著作は『根源的主体性の哲学』（一九四〇（昭和一五）年）である。この著作には、西谷が一九二八（昭和三）年一月から一九四〇（昭和一五）年三月にかけて執筆した論考が、その主題に応じて二部（第一部「宗教と文化」、第二部「歴史と自然」）に分かたれながら、全体としては「ほぼ、近頃のものから以前のものへといふ順に随って」[一]収録されている。この論文集は「苦渋な模索の時期」[二]として回顧されている西谷の三十代の思索の総決算であると同時に、自立した思想家としての西谷の独自な立場――それは「脱底の自覚」に基づく「新しい主体性」の立場と呼ばれている[三]――を初めて確立したものと一般に考えられており、その重要性は広く認められていると言ってよいであろう[四]。

「神秘思想史」

しかし『根源的主体性の哲学』に先立って、一九三二（昭和七）年二月に、西谷は長編の論文「神秘思想史」を公表している。この論文は『岩波講座・哲学』第五巻（問題史的哲学史二）に掲載されたが、その一部に一九二九（昭和四）年に発表された「プロティノスの哲学」（原題「プロチンの哲学」）が用いられていることから、実際には、その成立時期は『根源的主体性の哲学』に載録されている最初期の論文の起草時期と重なり合っていると考えられる。「神秘思想史」は、西谷を学会において有名にした「出世作」[五]であり、「内容的なまとまりから言っても、また量的な大きさから見ても、著者の本格的な著作と称してもよい最初のもの」[六]と見なされている。しかしそれにとどまらず、この論考の中で示されている西洋神秘主義についての西谷の理解が『根源的主体性の哲学』において確立される彼の独自な哲学的立場の成立に「大きな影響」[七]を与え、さらにまたその「原理的な立脚地」[八]になっているとするならば、「神秘思想史」は初期の著述では『根源的主体性の哲学』に準ずる重要性を有していると言って差し支えないであろう。

アリストテレス研究

ところで『根源的主体性の哲学』の緒言には「本書には著者がこの十年間種々の雑誌に発表したもののうち、思想史的研究に属するもの及び一二将来の改稿のために残したもの以外のすべての論文を収めた」[九]とある。「思想史的研究に属するもの及び一二将来の改稿のために残したもの」ということで具体的に何が念頭に置かれているのか、俄かに詳らかにするのは必ずしも容易でないが、少なくとも一九三三（昭和八）年と一九三五（昭和一〇）年に雑誌『哲学研究』に都合四回に亘って掲載されたアリストテレス研究（「アリストテレスの感性論――アリストテレスの哲学の概念、一」「アリストテレスの構想論――アリストテレスの哲学の概念、二」）が含まれているのは間違いないと思われる。[一〇]これらの論考はかなり後になってから加筆・訂正され、また増補されて『アリストテレス論攷』として上梓されている（一

九四八（昭和二三）年五月）。しかしその原型をなしている二つの論文が――「神秘思想史」に引き続いて――将来『根源的主体性の哲学』を構成することになる諸論考の執筆と平行しながら構想・執筆されているという事実は無視できないであろう。[一一]

『根源的主体性の哲学』第三部

さらに『根源的主体性の哲学』の緒言には「なほ、ここに収められた以前のものも、適当な機会に、第三部『思惟と意志』として別冊にして公にしたいと思ってゐる」[一二]と記されている。『根源的主体性の哲学』第三部には、『根源的主体性の哲学』第一部および第二部に収録されている諸論考に先立って、つまり一九二四（大正一三）年から一九二八（昭和三）年にかけて、既に公表されていた五篇の論考が収録される予定であった。ところが「適当な機会」は直ちには訪れず、出版の機会が巡って来たのは漸く『著作集』の刊行に際してであった。現在はこの五篇の論文に、著者本人の指示によって一九三五（昭和一〇）年に雑誌『思想』に連載された「宗教的実存の弁証法」が添加され、『西谷啓治著作集』第二巻「根源的主体性の哲学・続」に「根源的主体性の哲学・第三部・思惟と意志」として収録されている（一九八七（昭和六二）年一月刊）。

このように『根源的主体性の哲学』は、第一部、第二部、第三部と進行するにつれて、逆に成立の時期が次第に遡る。この進行が西谷の思索の「出立点」へ向けての遡行であるとするならば、本来第三部を構成すべきであった五篇の論文と共に、われわれはまさにそのような「出立点」の最も近くに位置している、ということになるであろう。「思惟と意志」所収の論考は発表順ではなく、成立年代順に載録されている。それ故、「出立点」という観点を厳守する限り、第一論文「悪の問題に就いて」には当然ながら、特別な意義が認められなければならない。事実、この論文は、その末尾に一九二三（大正一二）年二月二四日と記されているように、大学の二回生から三回生に進級する折りに、師である西田幾多郎の特殊講義（演習？）の為に、西谷が提出したレポートが基になっており、西谷のいわば「処女論文」なのである。[一三]

「シェリングの絶対的観念論と ベルグソンの純粋持続」

『根源的主体性の哲学』第三部には――第一論文「悪の問題に就いて」に続けて――第二論文として「シェリングの同一哲学と意志――実在的なるものと観念的なるもの」が載録されている。元来、この論文は「das Reale と das Ideale ――シェリングの同一哲学を中心として」という表題で雑誌『哲学研究』第一〇四号、第一〇五号（いずれも一九二四（大正一三）年刊）に発表されたものである。しかし『著作集』第二巻に収録されるにあたり、著者自身の手によって表題が現在のように変更されている。

この第二論文（ないし『哲学研究』掲載論文）は、初出の際に著者が自ら論文の冒頭に注記しているように、[一四] また一九二四（大正一三）年一月一五日という日付けが示唆しているように、西谷が一九二四（大正一三）年二月に京都帝国大学文学部に提出した卒業論文「シェリングの絶対的観念論とベルグソンの純粋持続」の一部である。

現在、この卒業論文は『西谷啓治著作集』第十三巻（一九八七（昭和六二）年一〇月刊）に、『哲学研究』掲載論文と重複している部分を省略するという変則的な形態で収録されている。これが初出であり、これによって西谷の卒業論文の全容が初めて明らかになった。

西谷の卒業論文は、分量の面から見ると、単独の論文としては、彼の初期の著述の中では「神秘思想史」に次ぐ（同時にまたそれに匹敵する）膨大なものである。[一五] これに対して『哲学研究』に掲載された論文は、量的には卒業論文の半分にも満たない。しかも後者は前者をそのまま要約したものというわけではない。その為に、前者は後者から切り出されたもの、同一の素材からなるものであるはずなのに、通読から受ける印象は相互に全く異なっている。つまり、確かに元の論文から主にシェリングを論じている重要な節が選び出され、もう一つの論文が新たに編まれているのであるが、それにもかかわらず――卒業論文を読んだことのない人にとっては――『哲学研究』掲載論文から卒業論文の内容を推測することは事実上不可能になっているのである。[一六]

『哲学研究』掲載論文とは別に――したがってまた『根源的主体性の哲学』第三部とは別に――この卒業論文自体も、西谷の最初期の思索圏を構成する重要な契機の一つに数え入れなければならない、と考えられるのは――今はまだ深く内容に立ち入ることができず、そのためごく一般的な理由の指摘に終始せざるをえないのであるが――例えば、このような事情に基くのである。

『シェリング・自由意志論』と『ベルグソン』

最後に、卒業論文と同等の重要性を有するものとして、卒業論文から直接に派生している二つの仕事も閑却されるべきではないだろう。すなわち、シェリングの二つの著作（『哲学と宗教』、『人間的自由の本質』）の全訳と解説（『シェリング・自由意志論』岩波書店、一九二七（昭和二）年六月）であり、[一七] 企画されながら結局、執筆されずに終わった幻の書、《西哲叢書》の一冊『ベルグソン』である。[一八]

一・二　卒業論文の頃

西田幾多郎

西谷啓治は、西田幾多郎の京都帝大時代（一九一〇（明治四三）年八月―一九二八（昭和三）年八月）に弟子達の中では、後期の弟子に属する。[一九] 西谷が京大に入学し、西田に師事した時（一九二一（大正一〇）年四月）には、西田は退職まで約七年を残すのみであった。

『善の研究』は西田の京大着任後の一九一一（明治四四）年一月に、『思索と体験』は一九一五（大正四）年三月に公刊されている。また『思索と体験』の刊行に先立って、後に『自覚における直観と反省』として纏められる一連の論文の連載が、一九一三（大正二）年九月から始まっている。この連載は一九一七（大正六）年五月に完結し、「序」と「跋」が追加されて同年一〇月に一書として上梓されている。さらに一九二〇（大正九）年一月には『意識の問題』が出版されている。これは西谷の京大入学の前年である。

西谷の在学中（三回生の夏・一九二三（大正一二）年七月）に『芸術と道徳』が刊行されている。ゆえに西谷の京大在

学期間は『芸術と道徳』所収の諸論考の執筆・発表の時期と大体重なっている（十三篇の論文中、最初の二篇を除く、十一篇が西谷の在学中に執筆されている）。さらに『働くものから見るものへ』の前篇となる論考も書かれつつある。『芸術と道徳』の刊行後、西谷が卒業するまでの間に、前篇の五つの論文中、最初の三つ（「直接に与へられるもの」「直観と意志」「物理現象の背後にあるもの」）が発表され、第四論文「内部知覚について」の連載が始まっている。『働くものから見るものへ』の出版は西田退職の前年の秋（一九二七（昭和二）年一〇月）である。

田邊元

田邊元は、西谷入学の約一年半前、一九一九（大正八）年八月に京大に助教授として来任している。既に著書として『最近の自然科学』（一九一五（大正四）年一一月）、『科学概論』（一九一八（大正七）年九月）があり、ポアンカレ『科学の価値』の翻訳も出版している（一九一六（大正五）年六月）。西谷は入学年度（一九二一（大正一〇）年）に田邊の特殊講義（「推理論」「無限連続の論理」）および講読（『純粋理性批判』）を受講している。[一〇] しかし年度の終わり（三月）に田邊はヨーロッパに留学し、帰朝したのは一九二四（大正一四）年一月、すなわち西谷の卒業の間際であった。田邊は副査として（主査である西田、同じく副査である朝永三十郎とともに）西谷の卒論の試問に立ち合っている。同年の一〇月に『カントの目的論』が刊行されている。

同級生・先輩・後輩

西谷と同学年には、同じく第一高等学校の出身で同郷の戸坂潤がおり、その親しい交際の様子が師の姿と共に回想されている。[一一] 一年上に高坂正顯、三土興三、二年下に下村寅太郎がいる。一高の先輩である三木清は、西谷入学の前年の七月に卒業している。[一二]

一・三　卒業論文をめぐる論点

西谷哲学研究の現状

我が国において《京都学派の哲学》、或いはより一般的に《日本の哲学》に関する学術的研究が制度的に確立したのは比較的最近の出来事である。しかしこの研究分野は急速かつ着実に定着しつつあるだけでなく、国内外において今後の一層の展開と進展が見込まれている。(二三)

京都学派の哲学の中心人物は、言うまでもなく、西田幾多郎と田邊元である。西谷はその直系とも言うべき第三の人物であるが、西田、田邊に比べると――かつての田邊のように冷遇されているというのでは決してないが――(二四)それでも研究の蓄積は未だ十分とは言えない。西谷に関する研究はまだ緒に就いたばかりというのが実情であろう。

そのような状況の中で、西谷に関する研究は、論者の関心によって多少ばらつきが見られるとはいえ、全体としては主著『宗教とは何か』を中心とする円熟期の著作に集中している。これに対して『根源的主体性の哲学』に先立つ西谷の思索が考察の対象とされるのは、もちろん皆無ではないが、やはりその場合でも主著を始めとする円熟期の著作との連関において論究されるのが殆どであり、それ自体が詳細な分析の対象とされる例は多くはない。このような傾向は、西谷の思索の「出立点」に向けて時期を遡るにつれて、さらに一層顕著になるようである。(二五)

卒業論文の重要性

なかでも卒業論文――それは西谷の思索のこのような「出立点」の一つである――は、『著作集』の刊行以前には、ごく一部の人を別にするならば、一般の人の目に触れることはまずなかったと考えられる。そのような事情もあり、この論文は、西谷の他の著作や論文などと比較すると、十分に読まれてきたとは言えないかもしれない。実際、これを裏付けるかのように、卒業論文そのもの、或いは、卒業論文と『哲学研究』論文（「das Reale と das Ideale――シェリングの同一哲学を中心として」）との関係、さらには卒業論文から窺い知ることのできる京大在学中の西谷の研究の具体的内容などについて――『著作集』刊行以前だけではなく、刊行後それなりに十分に時間が経過した現在でも――必ずしも正確とは言えない発言や記述がしばしば見受けら

れる。またこのように卒業論文が広く一般に読まれていない理由には、この論文――或いは最初期の西谷の論文全般の特徴とも言える――独特の難解さも手伝っているかもしれない。[二六] しかしそれにもかかわらず、卒業論文に限って言えば、この論文の重要性（それは間接的には卒業論文の本格的な研究の必要性でもあるだろう）は既に複数の論者によって指摘されている。以下では、その種の指摘のうち、代表的なものを紹介しながら、卒業論文の本格的究明に際して小論が採るべき方向性を探ることにしたい。[二七]

卒業論文をめぐる五つの論点

ここでは五つの論点が取り上げられる。第一の論点は京都学派の哲学の展開において西谷の卒業論文が果たした意義に関するものであり、第二から第四までの論点は卒業論文における主題、つまり〈シェリングとベルクソン〉という組み合わせに関するものか、或いはそれと連関するものである。

一・三・一　京都学派の展開――田邊の西田哲学批判

第一の論点は《京都学派の哲学》の展開において西谷啓治の卒業論文が果たした意義に関するものである。「西田・田邊哲学とシェリング」[二八] において藤田正勝はこのような観点から西谷の卒業論文を取り上げている。

田邊の西田・ヘーゲル批判

田邊による西田批判が《京都学派の哲学》の展開において重要な転換点となっている、ということは改めて指摘するまでもないであろう。というのも、田邊は西田の退職の二年後に、論文「西田先生の教を仰ぐ」を雑誌『哲学研究』（一九三〇（昭和五）年）に発表し、公然と西田批判を開始するが、この批判は田邊をして彼独自の哲学体系（いわゆる「種の論理」）の構築へと向かわしめる機縁となり、その起点ともなったからである。

この論文における田邊の西田批判の要点は、藤田による

と、第一に、絶対的なものを「与へられたもの」として前提し、全てをその自己限定とするなら、その哲学は「発出論的」構成をとらざるをえず、これによって現実の事物は絶対的なものの単なる反映に化さざるをえない、ということであり、第二に、このように現実が「影の存在」（絶対的なものの単なる反映）と解されるところでは、歴史を支配する非合理性やその中に出現する悪を十分に捉えることができない、ということである。しかしこの時、田邊によって「ヘーゲルの体系」がその「顕著なる一実例」と見なされているように、田邊の西田哲学に対する批判は彼のヘーゲル批判と深く結びついている。

田邊のシェリング受容

このような田邊のヘーゲル・西田批判は、藤田によると、シェリングの『人間的自由の本質』における「神の内なる自然」の思想に着想を得ており、それを念頭に置いて行われている。「西田先生の教を仰ぐ」の前年に発表された論文「行為と歴史、及び弁証法のこれに対する関係」において既に田邊はヘーゲル哲学を「現実の一切を観想的に眺めて凡てを目的論的に合理化する」ものと批判し、それとの対比でシェリング哲学への積極的評価[二九]を語っていたが、今やそれをふまえて（「西田先生の教を仰ぐ」において）歴史の非合理性や悪が可能であるためには、西田のように「絶対無の自覚」を考えるだけではなく、同時に「自覚の内にあって、而も自覚に反対するもの」、「若し自覚を光の原理とするならば、これに背く闇の原理ともいふべきもの」――すなわち、シェリングの「神の内なる自然」に相当するもの――を考えなければならないと主張するに至るのである。この間の事情を藤田は次のように推測している。

> 田邊はヘーゲル弁証法についての批判的な検討を行うなかで、シェリングの思想、とりわけその「神のうちなる自然」の概念に着目したのではないかと考えられます。そしてそれに依拠してヘーゲルの弁証法に対する批判を行おうとしたときに、西田哲学がやはりその視点から批判されうることに気づいたのではないかと思います。『ヘーゲル哲学と弁証法』に収められた一

連の論文を発表していく過程で、わざわざそれを中断して「西田先生の教を仰ぐ」を執筆したのは、そのことによると思います。そしてこの論文において西田哲学に対する批判を行ったのち、田邊は改めてヘーゲルに対する批判を行っています。[二〇]

西谷の卒業論文

ところで藤田は、田邊がシェリングの後期思想に関心を抱くようになった直接の原因は西谷のシェリング研究にあるとし、西谷の次のような証言を引証している。

私の卒業論文にシェリングの『自由論』を問題にしてゐる部分があつて、先生は試問のためにその書を読まれ、そして（先生自身の言明によれば）それに深く揺り動かされた。私の自惚れでなければ、そのことが、その後先生が次第にドイツ観念論に深入りされる一つの機縁をなしたと思ふ。[二一]

もっとも西谷はこれに続けて次のように述べている。

もちろん、先生の関心をドイツ観念論へ向けしめた主要な動機は、カントの目的論を踏まへた先生の立場そのものの内からの発展、また当時のドイツにおけるヘーゲルの復興とか形而上学への道を求める気運とかであったろう。それとは別に、当時の日本で勃興してきたマルクス主義が先生に与へた刺激も、重要な要因であった。

しかし藤田によると――たとえさらにこれに加えて、これ以前に田邊にとってドイツ観念論の哲学（フィヒテ、ヘーゲル）が全く未知のものではなかった、という事情を勘案するとしても――西谷の言葉を「単なるうぬぼれや思い込み」として一蹴することはできないのである。西谷の言葉を裏付ける有力な証拠として藤田が挙げているのは、一九二八（昭和三）年（すなわち「行為と歴史、及び弁証法のこれに対する関係」の発表と同年である）に、田邊がシェリングの『人間的自由の本質』を演習のテキストとして使用し

ているという事実である。[二一]

一・三・二　主題をめぐって（一）
――西田による影響

第二から第五の論点はすべて、シェリングとベルクソンという二つの哲学者を結び付けて論じるという、卒業論文における西谷の独特の着想に関するものである。

『善の研究』――藤田の見解

藤田もまた前述の講演録においてこの西谷の着想を取り上げ、それに対する西田の影響を指摘している。

この論文も、西田から刺激を受けて書かれたのではないかと思います。シェリングとベルクソンとを結びつけて一つの論文のなかで論じるというのはすぐには思いつかないことですが、西田の思想をその背景に考えると、事柄の結びつきが見えてくるように思います。西谷のなかでは、シェリングがその同一哲学において考えた「主客の真に一なる世界」へは、いかにして至りうるのかという問い、そして、ベルクソンの言う直観がその手がかりになりうるのではないかという問題意識が、両者［＝シェリングとベルクソン］を結びつけていたと考えられます。[二二]

「その背景に考えると、事柄の結びつきが見えてくる」西田の思想とは、『善の研究』第一編「純粋経験」第四章「知的直観」において「シェルリングの同一 Identität は直接経験の状態である」[二四]という言葉によって語られている思想である。西田においては、このようにシェリングの絶対的同一性（と知的直観）が彼自身の純粋経験における主客合一の状態と重ね合わせて理解されている。この西田の自己理解を背景として西谷は、一見すると相互に無関係に見える、シェリングの絶対的同一性とベルクソンの純粋持続という主題の結合を着想しえた、というのが藤田の発言の大意であると思われる。ただしその場合、ベルクソンの純粋持続と彼の直観の立場は、予め西田の純粋経験および知

的直観の立場と関係付けられている必要があるだろう。[三五]

『自覚における直観と反省』――長谷の見解

藤田と同様に、卒業論文における主題の独特な結合に注目し、それに対する西田の影響を指摘しているのは、長谷正當である。もっともその際に長谷が着目しているのは、『善の研究』ではなく、『自覚における直観と反省』である。

西谷がベルクソンとシェリングの間に見出した繋がりは〔中略〕西谷の直観に基くものであることは言うまでもないが、ある意味で西谷はこの直観を西田から得ていると言いうるように思われる。というのは、西田が『自覚に於ける直観と反省』においてフィヒテからベルクソンへと切り開いたその思索の道は、問題としては、シェリングがフィヒテから出発して歩んだ道に通じるものであるからである。『自覚に於ける直観と反省』の序文のなかで、西田は自分はいったんフィヒテの「事行」の立場に立ったが、意味と存在、価値と実在の統一を求めてベルクソンの直観の方向へ進んだと述べている。西田は、当時の哲学上の諸問題と格闘しつつ思索するなかで、フィヒテからベルクソンへ至る道を独力で切り開いたのであるが、フィヒテをいかに超えるかという問題はシェリング自身が取り組んだ課題でもあったのである。西谷は、シェリングの研究に取り組んだときに、その辺の事情をよく理解していて、西谷自身がフィヒテからシェリングへの道を跡づけるなかで、他方に、西田がフィヒテからベルクソンへと歩んだ道を念頭に置き、フィヒテを頂点にベルクソンとシェリングを底辺の二角とする三角形を頭の中で思い描いていたと考えることができるのである。[三六]

西田は『自覚における直観と反省』の「序」において次のように述べている。

余が此論文の稿を起した目的は余の所謂自覚的体系の形式に依ってすべての実在を考へ、之に依って現今哲

学の重要なる問題と思はれる価値と存在、意味と事実の結合を説明して見ようといふのであった。無論、余の自覚といふのは心理学者の所謂自覚といふ如きものではない、先験的自我の自覚である。フィヒテの所謂事行 Tathandlung の如きものである。〔中略〕其後此考を何処までも徹底的に追究して見ようとしたのが此書の起源である。若し此目的を達するを得ば、フィヒテに新しき意味を与ふることに依って、現今のカント学派とベルグソンとを深き根柢から結合することができると思うたのである。[二七]

「フィヒテに新しき意味を与ふることに依って、現今のカント学派とベルグソンとを深き根柢から結合する」という西田の言葉を、ここで長谷は「いったんフィヒテの「事行」の立場に立ったが、意味と存在、価値と実在の統一を求めてベルクソンの直観の方向へ進んだ」と言い換えている。したがって長谷の言う「進んだ」とは、フィヒテの事行の立場が捨てられるという意味ではなく、フィヒテの事行の立場に「新しき意味」を与えること、具体的には、この立場がベルグソンにおいて「直観」と呼ばれている「知の根拠のリアルな把握」[二八]にまで拡張される、という意味でなければならない。[二九]

ところが長谷によると、西田に先立ってシェリングもまた同じ問題に直面していた。というのも、「自我の自覚を哲学の原点とする点においてシェリングはフィヒテと同じ立場から出発したが、自我をさらにその根底の自然との関係において追究することにおいてシェリングはフィヒテを離れ、自然哲学へ向かうことになった」[四〇]からである。長谷によると、西谷はこの歴史的事実を熟知しており、〈ドイツ観念論の思想の展開〉と〈西田の思索の展開〉の双方を念頭に置きながら「フィヒテを頂点にベルクソンとシェリングを底辺の二角とする三角形」を想い描くことによって、ベルクソンとシェリングという主題の組合せに想到したのである。

一・三・三　主題をめぐって（二）
――シェリングとフランス・スピリチュアリスムの思想的連関および西谷の

思索における「フランス的側面」

しかし長谷の場合には、この主題の取り合わせの由来について西田の影響――厳密に言えば、西田自身と〈フィヒテからシェリングへ〉という二つの思想展開の平行関係に関する西谷の洞察――を指摘するだけではなく、それとは異なった角度からのアプローチも見出される。それは卒業論文における主題の取り合わせの起源を〈シェリングとベルクソン（フランス・スピリチュアリスム）との思想的類縁性〉に、また〈このような両者の思想的類縁性についての西谷の洞察〉に求めるものである。

シェリングとフランス・スピリチュアリスム

先の引用に先立って、長谷は次のように述べている。

西谷の卒業論文がシェリングとベルクソンに関するものであったことは、今日ではその著作集からも知られている。しかし、西谷が卒業論文を書いた当時は二つの哲学の繋がりは思いもよらないことであったらしく、たとえば野田又夫は西谷への追悼の文章の中で、「田邊先生から西谷先生の卒業論文がシェリングとベルクソンであったことを聞いて目を丸くしたが、後に哲学の歴史からも、ラヴェッソンがシェリングと深く繋がり、ラヴェッソンを介してベルクソンがシェリングと深く繋がっていることを納得して、その直観的洞察力に感服した」と述べている。[四一]

さらにまた次のようにも言われている。

しかし、この二つの哲学の連関を取り上げ、両者に共通する問題を主題的に追究した論考はあまりないように思われる。そこで、ここではシェリングの哲学をフランス・スピリチュアリスムとの関わりにおいて考察し、両者に共通する根本の問題を「自覚における自然」という観点から掘り下げてみたい。[四二]

その際の長谷の主張の要点は、ラシュリエによるフラン

ス・スピリチュアリスムの定義「自然そのものの説明を精神に求め、自然において働く無意識的思惟は我々において意識的となる思惟であり、無意識的形式から意識的形式への移行を可能にするような有機体を生み出すべく働いている思惟であると考えるもの」[四三]に従って、このような精神と自然の連続性の問題に焦点を当てている点に、この二つの哲学の繋がりを見て取るところにある。つまり、「意識的自我が孤立した点として宇宙に投げ出されているのではなく、自然や無意識といった宇宙に連なる広い裾野のうえに成り立っているものとして捉えるところに」[四四]二つの哲学の思想上の類縁性を見るのである。[四五]

このようにして長谷は、基本的には野田の示唆の延長線上に、ただし遥かに精密に――種々の具体的な論拠を示しながら――シェリングとフランス・スピリチュアリスムの類縁性を思想史的に裏付け、このことによって〈シェリングとベルクソンという主題の組合せの起源が両者の思想的類縁性と、そのような類縁性についての西谷の歴史的・直感的な洞察にある〉ということを示そうとしているのである。

「フランス的側面」

しかしさらにまた長谷は、西谷自身を――ジャンケレヴィッチ、マルセルなどと共に――「この二つの哲学の「あいだ」でその思索を進めた哲学者」[四六]として規定している。つまり、ここで長谷は「ベルグソンとシェリングを繋ぐもの」は同時にまた西谷に固有の直観（これはおそらくベルクソンの《哲学的直観》に類するものと考えてよいであろう）でもあるとし、そのような仕方で二つの哲学の「あいだ」を西谷自身にいわば内面化するのである。

> ベルグソンとシェリングを繋ぐものを、西谷はいったいどこに捉えたのであろうか。西谷が両者の根底に見出した共通なものは、また西谷の思索の根本に根差した直観でもあったように思われる。自覚の基礎となるような自然、あるいは身体がそこで捉えられている。[四七]

ただし長谷の強調点は、西谷自身におけるこの「あいだ」

そのものにあるわけではなく、むしろ「表に現れているのはごく一部で、その大部分はまだ地下に隠れたままになっている鉱脈」と見なされる、西谷の思索の「地下に隠された」側面、つまり「初めから先生のうちにあった」その「フランス的側面」にある。

西谷先生とフランス哲学の繋がりは先生のベルクソンとの関りから始まる。先生の卒業論文が、シェリングとベルクソンの繋がりを巡ったものであることは、「そのころの九鬼先生」の中で西谷先生御自身が語ってもおられ、またその一部は先生の著作集第十三巻に収められている。〔中略〕事実、先生はベルクソンをはじめとし、その前後のいわゆるフランス・スピリチュアリスムの哲学に通暁しておられた。西田幾多郎は西谷先生からメーヌ・ド・ビランの著作を借りて読んでおられることがその書簡から窺われるが、ラヴェッソン、ラシュリエ、ラニョーなどビランからベルクソンを繋ぐ哲学者たちに関しても二人の間で相互の交換があったと思われる。

〔中略〕

こうして、先生は、それぞれ異なった峰であるドイツ観念論とフランス・スピリチュアリスムの間にある繋がりを直感的、かつ歴史的に掴んでおられたことは確かであるが、ドイツ観念論について述べたり書かれたりしているのに比して、何故かフランス・スピリチュアリスムの哲学について語られることは少なかったように思う。ベルクソンについてもその『Ecrits et paroles』三巻は出ると同時に丁寧に読まれていたことは、あるとき何かの用事でうかがった先生のお部屋の書棚に並んでいたその書の頁の色褪せた具合からも判ぜられたが、ベルクソンについていろいろ語られたあとでも、先生は実はあまりよく知らないけれども、と付け加えるのが常だった。〔中略〕若い頃ベルクソンについて書くことを予定されていた書もどういうわけか結局書かれずじまいであったことは後から知った。大学院に入ってからも何かの用事で先生の研究室に伺った際に、ベルクソンのイマージュについてだったか、何かそれに類することをお尋ねしたが、そのときは先生は頭に

手を当てて考えこまれたまましばらく何も答えられなかった。〔中略〕こういう次第で、フランス哲学への西谷先生の関りは深いにも拘わらずその影響ということになると大部分が地下に隠されたままであると言わねばならない。[四八]

しかし、その隠された部分は大谷大学に於ける講義での「身体」についての先生の透徹した理解において現われている。それは影響によると言うより、先生ご自身の思索と体験に基づくものと言わねばならないが、敢えて言えば、先生とフランス哲学との関りが地下鉱脈のなかで成長し、「生きる」という直接経験の深みが「身体」という概念において反省され、哲学的表現を与えられることになったと言えるかもしれない。[四九]

こうして結局、長谷は西谷の卒業論文における〈シェリングとベルクソン〉という主題の組合せについて三つの源泉を指摘したことになる。まず第一に、西田の思想展開についての――哲学史的な事実（ドイツ観念論の展開に関する）をふまえた上での――西谷の理解であり、第二に、シェリングとフランス・スピリチュアリスムの思想的類縁性とこの類縁性に関する西谷の歴史的・直感的な洞察であり、第三に、西谷に本来備わっている根源的直観（内面化された二つの哲学の「あいだ」であり、特にその「フランス的側面」）である。

一・三・四　主題をめぐって（三）
――西谷の哲学史的洞察

薗田坦は、長谷が指摘していたような、シェリングとベルクソン（ないしフランス・スピリチュアリスム）という《特定の》思想史的連関に関する西谷の直感的・歴史的洞察に注目しつつも、それを単にそのようなものとして捉えるだけでなく、まさにこのような洞察を可能ならしめている西谷の一層根源的で包括的な基底、つまり、その哲学史的洞察の《全体》とでも言うべきものにまで遡り、先の洞察もまたそのような広大な地盤において初めて成立しうるものとして、その根源の方から捉え直そうとしている。

西谷先生の著作や講義に接するたびにいつとても感じさせられるのは、一口に言えば、先生の思想の独創性や深底性が、つねに同時に豊富な歴史的知見と洞察に裏打ちされているという点である。先生がどのような哲学者あるいは哲学思想を問題とされる場合でも、そこではまずそれらの思想のもつ歴史的諸連関や哲学史的な意味が明確にされた上で、次いでそこから、またそれに立脚しながら、その思想の本質的内容そのものが究明され、その深みが独自な仕方で剔抉されていく。先生において、このような思想の哲学史的定位や闡明と、その本質論的究明や開示という二つの側面は、まさしく不即不離の関係にあり、しかもその両面が互いに切り結び合うところから、先生御自身の独特な思想が醸成されてくるという趣きがある。

先生の哲学的思索の基底には、このように一方から見れば、つねに哲学史の大きな流れといったものが把捉され、前提されている。しかもその流れの把握は、（西洋思想に限ってみても）いわゆる西洋哲学史のほぼ全体を覆うものである。〔中略〕このようなヨーロッパ精神史の大きな流れが、その主要な筋道と節目をふまえつつ全体にわたって把捉され、それらがたえず先生の哲学的思考の背景にあって、これを離れることがない。そのことが先生の思考の重要な特質をなし、いわば独自なスタイルとさえなっているように思われるのである。

こうした哲学的思考のスタイルは、恐らく先生に独自な資質として、いわば本性的に具えられたものであろう。勿論、先生の研究の進展とともに、例えばアリストテレスが、エックハルトが、或いはまたニーチェが、哲学史的考察の枠が次々と拡張され、それぞれの専門的論攷が順次発表されていくわけであるが、それにしてもこれらの思想に解明の光が当てられる場合、その視線はいつでもすでに先生固有の哲学史的（精神史的）洞察とその大きな枠組に基づいて発せられているように見受けられる。先生はこうした独特な歴史的視線と哲学史の大きな枠組を、すでに相当早い時期に自ずから身につけられ、構築されておられたのであろ

う。

このことは一昨年、著作集第十三巻の校訂作業に際し、これに収録する先生の卒業論文「シェリングの絶対的観念論とベルグソンの純粋持続」の原稿を詳しく拝読する機会を得た折にも、強く印象づけられ、驚かされたことであった。この卒業論文は、シェリングとベルグソンの思想を主題的に論じたものであるが、そこにはすでに随所に、先生の歴史的洞察と哲学史的枠組を示す論述が見られ、主題的問題も――そしてまさにこのシェリングとベルグソンという取り合わせも――そのなかで定位され、そこから論究されているように窺われるのである。このように、先生がその哲学的産出活動のいわば始動期に、すでに西洋の哲学史全体の、少なくともその流れの大筋を組み立て、捉えておられたということは、実際驚くべき事実である。しかしまた、まさにそうであったからこそ、その後の先生の広汎にして独自な思考の展開と拡充も可能となったのであるとも言えるであろう。

西谷先生の思想における歴史的洞察や哲学史的知見という側面を強調することは、あるいは見当違いのように思われ、また誤解を招く恐れがあるかも知れない。しかし私はそうした側面も、先生の哲学的思考の決して軽視することのできない重要な契機ではないかと思っている。先生の東西両思想にわたる宗教－哲学的思索の根源性、独創性については、改めて言うまでもないが、そのような壮大にして深遠な思想構築の基盤には、いたるところにまた先生の鋭敏な歴史的洞察が光り、的確な精神史的知見が働いていることも――通常それほど注意は払われていないようであるが――決して忘れられてはならないのではなかろうか。(五〇)

ここでの薗田の強調点は確かに、西谷の独創的思索の根底において常に働いている西洋哲学史の全体に及ぶ広大で重厚な歴史的洞察・哲学史的知見にある。薗田によると、西谷は「こうした独特な歴史的視線と哲学史の大きな枠組を、すでに相当早い時期に自ずから身につけ」ていたのであり、卒業論文においても「すでに随所に、先生の歴史的洞察と哲学史的枠組を示す論述が見られ、主題的問題も

――そしてまさにこのシェリングとベルグソンという取り合わせも――そのなかで定位され、そこから論究されている」のである。

しかしその際、薗田はあくまでも西谷の思索の一つの側面に光を当てているのであって、その全体をこのような哲学史的洞察に解消しうると考えているわけではない。実際、薗田は「思想の独創性や深底性が、つねに同時に豊富な歴史的知見と洞察に裏打ちされているという点」に、西谷の哲学的思索の本性的特質を見出している。つまり、いかなる哲学者が取り上げられるとしても、「まずそれらの思想のもつ歴史的諸連関や哲学史的な意味が明確にされた上で、次いでそこから、またそれに立脚しながら、その思想の本質的内容そのものが究明され、その深みが独自な仕方で剔抉されていく」こと、そして、この二つの側面が「不即不離の関係にあり、しかもその両面が互いに切り結び合うところから、先生御自身の独特な思想が醸成されてくる」ことに、薗田は西谷の思考の独自なスタイルを見ているのである。

ところで薗田は、西谷の哲学的思索の「歴史的洞察や哲学史的知見という側面を強調すること」が「見当違いのように思われ、また誤解を招く恐れがある」のではないかという懸念を表明している。この懸念を杞憂に終わらせる為には、西谷の「哲学的思索の根源性、独創性にとって」彼の「独自な歴史的眼差し」がどのように関係しているのか、言い換えると、「思想の哲学史的定位や闡明と、その本質論的究明や開示という二つの側面」の「不即不離の関係」および「その両面が互いに切り結び合うところから、先生御自身の独特な思想が醸成されてくる」その機構が、具体的な事例に即して、例えば「シェリングとベルグソンという取り合わせ」が西谷の独自の「歴史的洞察と哲学史的枠組」「のなかで定位され、そこから論究され」るという事例に即して、詳細に解明されなければならないであろう。

一・三・五　主題をめぐって（四）
――西洋哲学の読み直し

このように薗田が、卒業論文の主題の取り合わせがそこにおいて成立するような根源的な基底に目を向け、そのよ

うな基盤としての――西洋哲学史の全体に及ぶような――西谷の哲学的思索の歴史的洞察や哲学史的知見の側面を強調していたとすると、それに対して上田閑照は、そういった根源的な地盤をふまえながらも再度、そこから成立してくる卒業論文の主題の組合せそのものの方へ目を振り向けて、その内に《西洋哲学の読み直し（の成果）》と《西田哲学の展開（単なる影響ではなく）》を見て取っている。このことによって上田はむしろ西谷の――薗田の区別を借用するならば――「哲学的思索の根源性、独創性」の側面を――おそらく他の誰にもまして――強調しているのである。[五]

西田幾多郎先生のもとでの卒業論文はシェリングとベルグソンをテーマにしたものであり、又若き助教授としてハイデッガーのもとに留学中そのゼミナールで行った報告はニーチェとエックハルトを主題としたものであった、「シェリングとベルグソン」、「ニイチェとエックハルト」、いずれも独特な組合せである。先生が組合わせた組合せである。西洋の哲学を東洋の洞察によって新しく読み直し、そのことが東洋の新しい自己理解になるとともに、それを超えて、東洋とか西洋とかいうのではない一つの世界での人間の根源的可能性の追究がなされてゆくそのような組合せである。

「シェリングとベルグソン」という組合せは、当の西洋の哲学においては必ずしも結びつかなかった直観における叡智性と感覚性との根源的結びつきを核心としている。そしてこれは元来西田幾多郎先生の「純粋経験」にこめられていたものである。「ニイチェとエックハルト」という組合せは、西洋の哲学では直接に究められなかった「虚無と虚無の無化」の動態をめぐって、虚無の徹底化と、虚無を無化する根源的生の底なき自由を主題化したものであり、これは西田哲学の「絶対無」の思想的可能性をニヒリズムの顕在化の中で展開したものと言える。この二つの独特な組合せのうちで早くから動いている問題意識（つづめて言えば、徹底的ニヒリズムと神秘主義の間で主体の自由を根源化し且つ具体化し、世界の自覚を透徹してゆくこと）と、それを導く根本洞察（主として大乗仏教の「空」とその実存化とし

ての禅から照らされた洞察）に、先生の生涯の思索を貫流する原動脈があると言うことができるであろう。そのような思索から、『根源的主体性の哲学』、『ニヒリズム』、『神と絶対無』、『宗教とは何か』、『禅の立場』などを主連峰とする測り知れない大きな奥深い思想山脈が生れて来た。(五一)

上田の主張を要約すると、次のようになる。つまり、「シェリングとベルグソン」という組合せはあくまでも《西谷が》組合せた「独特な組合せ」であり、この組合せは「当の西洋の哲学においては必ずしも結びつかなかった直観における叡智性と感覚性との根源的結びつきを核心とし」ていること、またそれは「西洋の哲学を東洋の洞察によって新しく読み直し、そのことが東洋の新しい自己理解になるとともに、それを超えて、東洋とか西洋とかいうのではない一つの世界での人間の根源的可能性の追究がなされてゆくそのような組合せ」であるが、このような「直観における叡智性と感覚性との根源的結びつき」は元来西田の「「純粋経験」にこめられていたもの」だということである。

しかし上田はさらに、もう一つの特異な組合せである「ニイチェとエックハルト」（論文「ニイチェのツァラツストラとマイスター・エックハルト」）(五二)も考慮に加えながら、「この二つの独特な組合せのうちで早くから動いている問題意識」と「それを導く根本洞察」の存在を指摘し（つまり「組合せ」、「問題意識」、「根本洞察」という三つの契機を分節し）、その内に西谷の「生涯の思索を貫流する原動脈」を見出している。

一・四　小論の立場

卒業論文をめぐる五つの論点は、相互に重なり合う部分を持ちながらも、やはりその強調点はそれぞれ異なっており、場合によっては一見相互に矛盾していると思われる箇所もないではない。しかしこれらの複数の論点はそのいずれもが独自の観点から卒業論文の魅力ないし重要性を語っており、その意味においてはそれらの論点は等しい意義を持っていると考えられなければならない。というのも、この論文のどのような側面に魅力を感じるかは論者の関心次

第であり、そこに優劣があるとは考えられないからである。しかしながら、それらの論点はまた卒業論文の内部へと通じている同数の通路の入り口とも見なすこともできる。このような観点を採る場合、卒業論文の内容そのものが十分に解明されているとは言えない現状を考慮すると、これらの複数の通路の中でもやはり、卒業論文の全体をその中心部から遍く照しだすことができるような、そうした通路を選択するのが最も適切であると考えられる。ではどのような論点がそのような通路を開くことができると考えられるであろうか。

このような観点からすると、薗田の論点、特にその「視線」という論点が有力な候補になるのではないか、と思われる。「勿論、先生の研究の進展とともに、例えばアリストテレスが、エックハルトが、或いはまたニーチェがと、哲学史的考察の枠が次々と拡張され、それぞれの専門的論攷が順次発表されていくわけであるが、それにしてもこれらの思想に解明の光が当てられる場合、その視線はいつでもすでに先生固有の哲学史的（精神史的）洞察とその大きな枠組に基づいて発せられているように見受けられる」と言われていた、その「視線」である。もっとも先の引用箇所においてはこの論点についてこれ以上の詳しい説明はなかった。しかし別の箇所ではこの論点についてより詳しい説明が与えられている。すなわち、薗田は西谷の「神秘思想史」について、次のように述べているのである。

これらの思想家〔＝プロティノス、アウグスティヌス、エックハルト、ベーメ〕のいずれもが、西洋神秘主義の歴史上の代表的な、しかもそれぞれに個性的な思想の持ち主であることは、ほとんど異論のないところであると思われる。ここで特徴的な点は、これらの神秘思想の主要な類型と見なされるものの全体が把握され、そこから見渡され得るような視点が確保されるとともに、それらの類型的思想のあいだの内的連関と相互の必然的推移をも見通し得るような観点がここで開示されていることであろう。そしてそのことは、さらに遡って言えば、著者がここでその神秘主義の理解からそこに含まれる根本問題として取り出した二つの問題点にまで関わり、あるいはそれらに由来していると言え

よう。一方ではそれは〔中略〕人間と世界を含めたいっさいの存在の根源としての神をどこまでも徹底的に遡源し、もはや単なる有ではなく無としてすら見ることに到り、しかも人間が自己の窮極においてその無の上に立つと考える徹底した立場に立とうとする。その意味において、それは人間の超越的・絶対的な自由を探索し、確保するという点で、きわめて卓越した意義を示すものである。他方では、人間と世界における悪の根源をどこまでも自己の内面に探り、善と悪へのいわゆる選択的自由の根拠を自己のうちに見出すという立場を開こうとする。これらが古来、哲学や宗教における根本問題とされてきたものに他ならず、神秘主義の立場はまさにこれらの問題をある独自な仕方で、しかもどこまでも徹底してそれに肉迫せんとした思想と体験として現われたものであったと言うことができよう。

こうした神の絶対性と自己の超越論的自由の確保、そして悪とその根拠の解明という問題は、再び著者の哲学的探求にとっても、いわばその最初期から中心的な関心事であり、しかもそれらがある独特な仕方で結びつき、相連関する仕方で問題とされてきたと見ることができるように思われる。先にも見た著者の「根源的主体性の哲学」という立場がその一例であり、端的に言って、そこでは根源的な自由の問題と悪の根拠の問題は、著者の言う無底的な根底（根源的主体性）から探求され、展開されていると見ることができるであろう。[五四]

ここで薗田は「これらの神秘思想の主要な類型と見なされるものの全体が把握され、そこから見渡され得るような視点」「それらの類型的思想のあいだの内的連関と相互の必然的推移をも見通し得るような観点」について語っている。しかしこれは先に「思想に解明の光が当てられる場合、その視線はいつでもすでに先生固有の哲学史的（精神史的）洞察とその大きな枠組に基づいて発せられている」と言われていたのと同一の事態を、「神秘思想史」という著作に即して、より具体的に述べ直したものと言ってよいであろう。

注目に値するのは、薗田がさらに――ちょうど上田が卒

業論文とニイチェ・エックハルト論文に関して指摘していたのと類比的に――このような視線の内に西谷の問題意識と根源的洞察（究極的立場）という二つの契機が同時に働いていることを指摘している点である、つまり「さらに遡って言えば、著者がここでその神秘主義の理解からそこに含まれる根本問題として取り出した二つの問題点にまで関わり、あるいはそれらに由来している」と述べると共に、このような観点を「根源的主体性」という根源的な立場に淵源するものとしている点である。

これによって薗田は、彼が以前、西谷の思索のスタイルと呼んでいたものをより詳細にかつ具体的に規定していると考えられる。なぜならば、ここでは西谷の思索における歴史的洞察と独創性との結び付きについて、問題意識と根源的洞察という契機が指摘されることによって、いま一歩立ち入った説明が与えられているからである。しかし同時にまた、このような説明が与えることによって、薗田の論点は、上田の論点と――その力点の置き方が正反対であるが故にかえって――相補的な関係にあることが明らかになっているとも言えるであろう。

さて「神秘思想史」の構造はまた卒業論文の構造でもあるように思われる[五五]（もちろん具体的な契機は異なり、〈シェリングとベルグソン〉という取り合わせに代えて「神秘思想史」では四人の神秘思想家の組合せが登場しているが）。それ故、小論においてわれわれは、卒業論文を対象にして、薗田の言う西谷の「視線（観点、視点）」の解明に主眼を置く。この視線はなによりもまず、これも薗田の意味における「哲学史的洞察」によって支えられており、さらに西谷の問題意識、究極的な立場によっても支えられている。しかし同時にわれわれは、薗田の論点（このように補強されたもの）を一方の極として、つまり出発点としつつ、その対極とも言うべき上田の論点へ、つまり終着点としてのそれと至りつこうとするであろう。これは要するに、薗田の言う「視線（視点、観点）」を受動的なもの、現状認識にとどまるものとしてではなく、むしろ上田が強調しているように能動的かつ創造的なものとして捉えるということである。またそのような運動の際に、他の三つの論点（西田との関係は勿論、長谷が指摘していた思想史的連関や「あいだ」の問題）もまた可能な限り回収していくことにも努めるであろう。

（未完）

註

（一）『西谷啓治著作集』第一巻、四頁
（二）『西谷啓治著作集』第一巻、三頁
（三）『西谷啓治著作集』第一巻、三頁
（四）『根源的主体性の哲学』が後の弟子達に与えた衝撃については、田中英三「天籟の人」（『西谷啓治著作集』第十三巻・月報）、辻村公一「西谷先生の痕跡」（『西谷啓治著作集』第二巻・月報）等を参照のこと。
（五）『下村寅太郎著作集』第十三巻、四四二頁
（六）薗田坦「解説」、西谷啓治『神秘思想史・信州講演』（「京都哲学撰書」第二十八巻、燈影舎、二〇〇三年）所収、二五五頁
（七）薗田、前掲書、二六〇頁
（八）薗田、前掲書、二五九頁
（九）『西谷啓治著作集』第一巻、三頁
（一〇）他方、「二将来の改稿のために残したもの」に関して言えば、その一つは後述の「宗教的実存の弁証法」ではないかと推測される。
（一一）帰朝後、三木清によって主催されたアリストテレス『形而上学』講読会に、西谷が参加したのは一九二六（大正一五）年である。
（一二）『西谷啓治著作集』第一巻、四頁
（一三）論文「悪の問題に就いて」は『哲学研究』第一四二号（一九二八（昭和三）年一月）に掲載された。第三部への収録が予定されていた五篇の論文中、これは四番目の発表順位となる（第二論文、第三論文、第四論文、第一論文、第五論文の順である）。なお発表の際に論文の末尾に「編集上の約束が余り長く延びるので、やむを得ず未熟祖本な、そして自らも今では（考へに於ても感情に於ても）承認しない所の少くない旧稿を以て、暫くその責をふさぐことにした」という著者の断り書きが添えられている。
（一四）「これはシェリングと共にベルグソンを取扱った卒業論文の一部で、ここにはシェリングに関する部分から主な所を抜いて載せることにした。篇中ベルグソンの名が比較的多く出るのはそのためである」『哲学研究』第一〇四号、三七頁
（一五）『著作集』の頁数で数えると卒業論文は全体で一三八頁になる。その五〇頁分――これは卒業論文の全十三節中、（四）、（十）、（十一）、（十二）の四節に該当する――に、さらに（一）、（三）の内容を要約した第一節――これは八頁になる――が新たに書き下ろされ、追加されることによって『哲学研究』掲載論文が成立している。これに対して「神秘思想史」は『著作集』においては一五二頁を占めている。
（一六）発表順で言えば、『根源的主体性の哲学』第三部の論文中、最も早いのは「das Reale と das Ideale――シェリングの同一哲学を中心として」である。しかしこの論文は卒業論文の一部である。その限りにおいて卒業論文は、西谷の「哲学的思索の原点（出発点）と著作活動の幕開きを告げるという記念碑的な意味」（『西谷啓治著作集』第十三巻、三六一頁）を持つ。
（一七）これは我が国における初のシェリングの著述の翻訳である。なお我が国最初のシェリングに関するモノグラフィーは、西田の夭折した弟子の一人である岡本春彦の『シェリングの象徴思想』（一九一八（大正七）年、肇文社）である。岡本は西谷と面識はないはずであるが、八木誠一との対談の中でシェリング研究の「先輩」として言及されている（西谷啓治・八木誠一『直接経験―西洋精神史と

宗教』春秋社、一九八九年、二八頁）。

（一八）「田邊先生の監修で、「西哲叢書」が刊行された時、西谷さんも編集に参加されたはずで、西谷さんは自発的にベルクソンを担当された。それはきっと独自なベルクソンになると、待ちかねる想いがしたが、なかなか出来上らず、結局、留学先で書きあげるということになった。原稿用紙を送れとのお達しで、原稿用紙は送られたが、結局一枚も送られてこなかった。終に出現にいたらなかった」『下村寅太郎著作集』第十三巻、四四二頁

（一九）「私が西田先生に習ったのは、先生の京大教授としての終りに近い時期です」「その頃の九鬼先生」『西谷啓治著作集』第二十一巻、一〇四頁

（二〇）「私が大正十年に京大へ入學した時は、田邊先生はまだ助教授であった。講義は集合論とか連續とかいふような數理哲學の問題で、演習には『純粋理性批判』の分析論のところを讀んでゐられた」「田邊先生のこと」『西谷啓治著作集』第二十一巻、八九頁

（二一）「戸坂潤の思ひ出」「田邊先生のこと」（『西谷啓治著作集』第二十一巻）、「京都感想」（『同』第二十巻）、臼井二尚「学生時代の西谷君」（『同』第二巻・月報）などを参照。

（二二）「わが師西田幾多郎先生を語る」（『西谷啓治著作集』第九巻）の中に、西谷によって書き留められている三木の姿は、登場回数は少ないものの、不思議にいずれも印象深い。

（二三）藤田正勝、ブレット・デービス編『世界のなかの日本の哲学』（昭和堂、二〇〇五年）、J・W・ハイジック編『日本哲学の国際性』（世界思想社、二〇〇六年）などを参照。

（二四）氷見潔「田辺元「種の論理」とヘーゲル弁証法」『ドイツ観念論と日本近代』（叢書ドイツ観念論との対話」第六巻、ミネルヴァ書房、一九九四年）所収、七四―七五頁

（二五）西谷のみを扱っている論集として次の二つがある。上田閑照編『情意における空――西谷啓治先生追悼』（創文社、一九九二年）、京都宗教哲学会編『渓聲西谷啓治〈下〉思想篇』（燈影舎、一九九三年）。また雑誌の特集として『理想』「特集西谷啓治」六八九号（理想社、二〇一二年）がある。単行本としては、氣多雅子『ニヒリズムの思索』（創文社、一九九九年）がある。なおここでは以上に留め、完全な文献表は論文末に付載する。

（二六）「初期の論文は難解が定評だった。卒業論文は、田邊先生も二度読まれたという「伝説」がある」『下村寅太郎著作集』第十三巻、四四二頁

（二七）西谷の卒業論文を扱っている論文としては、これ以外にも花岡永子の論文がある。Hanaoka, Eiko: "The Problem of Evil and Difference. A Report on Nishitani's Relationship to Schelling", in: *Schelling Now. Contemporary Readings*, Edited by Jason M. Wirth, Indiana University Press 2005.

（二八）『西田哲学会年報』第七号、二〇一〇年所収。また藤田には同一の主旨の講演「シェリングと日本の哲学」（『シェリング年報』第十七号、日本シェリング協会、二〇〇九年）がある。

（二九）「我々の採るべき具体的なる立脚地となるものは、実在と観念、自然と意識、非合理性と合理性、暗黒と光明、との内面的二元性を含むところのシェリング的観念実在論 Idealrealismus に外ならない。弁証法はその展開の原理となるのである」『田邊元全集』第三巻、二三三頁

（三〇）藤田正勝「西田・田辺哲学とシェリング」六―七頁

（三一）「田邊先生のこと」『西谷啓治著作集』第二十一巻、九〇頁

（三二）シェリング『自由論』演習の時期について藤田は「西谷が卒業論文を提出して少し間を置いてからのこと」と断っている。しかし西谷のシェリング翻訳はその前年すなわち一九二七（昭和二）年六月の出版である。その序において西谷は「田邊先生からは両書

の初版を拝借したり校正刷の一部を見て頂いた外、訳する最初から種々の御配慮にあづかった。その外に訳語の選定や字義の解釈に至るまで両先生の御教示に負ふ所が頗る多い」と述べている。このことからこの翻訳の企画そのものに田邊が関係している可能性は非常に高いように思われる。この翻訳の作業は田邊による西谷の卒論閲読から『自由論』演習までのギャップを埋めるものと考えられる。

（三三）藤田「西田・田辺哲学とシェリング」、八－九頁

（三四）『西田幾多郎全集』第一巻、四二頁

（三五）「コーヘンの純粋意識」『思索と体験』所収（『西田幾多郎全集』第一巻、三七四頁）には、シェリングとベルクソンが併記されている箇所がある。なおこの論文は西谷二回生の時（大正一一年）に刊行された増訂版において追加されたものである。

（三六）長谷正當「自覚における自然」『心に映る無限――空のイマージュ化』（法藏館、二〇〇五年）、一一四頁

（三七）『西田幾多郎全集』第二巻、三－四頁。同様に「改版の序」には次のように言われている。「私の思想の傾向は「善の研究」以来既に定まってゐた。その頃リッケルトなどの新カント学派を研究するに及んで、此派に対して何処までも自己の立場を維持せうとした。価値と存在、意味と事実との峻別に対して、直観と反省との内的結合たる自覚の立場から両者の総合統一を企てた。その時、私の取った立場はフィヒテの事行に近きものであった。併しそれは必ずしもフィヒテのそれではなかった。寧ろ具体的経験の自発自展と云ふ如きものであった。その頃ベルグソンを読んで、深く之に動かされた。さらばと云って、無論ベルグソンでもない。最後の立場として絶対意志の立場と云ふのは、今日の絶対矛盾的自己同一を思はしめるものでもあるが、尚それに至らざること遠いものである」『同』第二巻、一二頁。

（三八）長谷正當「絶対自由意志と象徴の世界――ベルクソンから見た西田哲学の位置づけ」（『心に映る無限』所収）、一八五頁

（三九）菅原潤もまた長谷と同様に、主題の組合せに対する『自覚における直観と反省』の影響を指摘しているが、その解釈は検討を要する。菅原潤『昭和思想史とシェリング』（萌書房、二〇〇八年）、第八章「反近代の思想」一四九－一五一頁、参照。

（四〇）長谷「意識における自然」、一一二頁。シェリングとベルクソン（ないしフランス・スピリチュアリスム）の思想的類縁性に関する長谷の見解については、本稿「一・三・三 主題をめぐって（二）」を参照。

（四一）長谷「意識における自然」、一一四頁。なおこの追悼文は新聞記事であると思われるが、特定することはできなかった。

（四二）長谷「意識における自然」、一〇四頁

（四三）長谷「意識における自然」、一〇七頁

（四四）長谷正當「西谷先生とフランス哲学」『西谷啓治著作集』第二十五巻・月報

（四五）長谷はデカルトに対するフランス・スピリチュアリスム（メーヌ・ド・ビラン、ラヴェッソン、ベルクソン）の関係がフィヒテに対するシェリングの関係に平行すると考えている。つまり、長谷は先程は、フィヒテからシェリングへの立場の移行を、西田との関係において捉えていたのであるが、それと同じ関係を、今度はデカルトとフランス・スピリチュアリスムの間にも見出すのである。長谷「意識における自然」、一一〇－一一二頁。

（四六）長谷「自覚における自然」、一一三頁

（四七）長谷「自覚における自然」、一一四－一一五頁

（四八）長谷「西谷先生とフランス哲学」

（四九）長谷「西谷先生とフランス哲学」

（五〇）薗田坦「西谷先生と哲学史」『西谷啓治著作集』第十六巻・月報。また以下も参照。薗田坦「最後の訪問」『創文』三一九号、一

一―一二頁、「この論文を拝読して私が何よりも強く印象づけられ、驚かされたのは、いわばこの哲学的処女作のうちにすでに随所に現われている、先生の独特な歴史的洞察力とでも言うべきものであり、またそれに基づいた豊富な哲学史的知見であった。［中略］先生の哲学的思索の根源性、独創性にとって、あの独自な歴史的眼差しといったものは、少くとも一つの重要な、しかも先生に固有な契機なのではないかと、私は最近ますます強く感じている」。

（五一）これに対して長谷は「確かで自明であった」がために「ことさら考察の対象として取り上げるまでもなかった」「二つの哲学の間にある繋がり」を主題としてシェリングとフランス・スピリチュアリスムの思想の関連について論じていた。

（五二）上田閑照「西谷啓治先生のこと」（『情意における空』所収）、三三一―三三二頁

（五三）『西谷啓治著作集』第一巻「根源的主体性の哲学」所収

（五四）薗田坦「解説」（『神秘思想史・信州講演』）、二六三―二六四頁

（五五）「神秘思想史」における四人の神秘思想家の組合せに見出される独創性については、福谷茂「〈哲学史〉という発明」（『岩波講座・哲学 14 哲学史の哲学』岩波書店、二〇〇九年）、「テキストからの展望」の「西谷啓治「神秘思想史」」の項目（五一―五二頁）を参照されたい。そこで福谷は次のように述べている。「西谷啓治（一九〇〇―九〇年）が三〇歳代はじめに世に問うた本編が奇蹟であるゆえんは、その完成度の高さと内容の豊富さにあることはもちろんであるが、それにもまして、ヨーロッパの神秘主義研究の成果を踏まえながら、しかもヨーロッパでは樹立されていなかった系譜を打ち出したという点に存する。プロティノスからアウグスティヌスとエックハルトを経てベーメへという系譜はまったくユニークなものであって、日本人にして、なかんずく西田哲学を身につけた日本人にして、初めて〈観る〉ことができたものであろう。現在でもヨーロッパで神秘思想史が書かれるとき、この四人を並べて主軸とするということは考えられないのではないだろうか。女神アテーナのように、生まれたときから完全武装で現れた西谷の神秘思想史の独創性は、日本の西洋哲学史が通史としては明治から今日までヨーロッパの図式を引き写してきたことと鮮やかな対比をなしている。歴史的であって、同時に神秘主義の四類型を網羅したという意味では論理的でもあるこの神秘思想史は、ヨーロッパ人のほとんどあずかり知らぬものであるとさえいえよう」。

Keiji Nishitani und seine Einsicht in die Philosophiegeschichte
—— Die Philosophie der Kyōto-Schule und die Geschichte der Philosophie ——

Kouki ASANUMA

In seiner im Jahr 1924 geschriebenen Abschlussarbeit »Schellings absoluter Idealismus und Bergsons reine Dauer« behandelt Keiji Nishitani (1900-1990) vergleichend und aufeinander beziehend ausführlich diese beiden Philosophen. Es ist sehr selten, dass man in einer Abhandlung auf das Verhältnis zwischen Schelling und Bergson näher eingeht. Dies gilt nicht nur damals, sondern auch bis jetzt noch. Die Abschlussarbeit Nishitanis ist ein solcher Sonderfall.

Der Hintergrund, der Nishitani diese Betrachtungsweise möglich macht, ist die frühe Philosophie von Kitarō Nishida (1870-1945), unter deren Einfluss Nishitani seine eigene Einsicht in die Philosophiegeschichte entwickelt hat. Erst in dieser Einsicht stellt es sich deutlich dar, dass Schelling und Bergson in ihrer Denkart eine starke Affinität zueinander haben, obwohl sich sie in einigen wichtigen Punkten unterscheiden. Dabei wird die ganze europäische Philosophiegeschichte unter seinem eigenen Gesichtspunkt betrachtet und dadurch werden neue Perspektiven auf das Verhältnis beider Denker entworfen.

In dieser Arbeit will der Autor diesen Gesichtspunkt und diese Perspektiven detailliert erläutern.